

## 立山曼荼羅

立山曼荼羅は、江戸時代（1603～1867 年）に信仰されていた立山信仰を説明するために描かれた精巧な絵画で、立山の霊峰登山が宗教的な修行を積んでいない人々にも可能になった時代に、信仰の教義を親しみやすく説明することを目的として制作された。伝統的な曼荼羅（仏教の教えや宇宙を視覚的に表現したもの）の形をとっているが、当時広く親しまれていたであろうシンプルでカラフルなイメージを用いている。

立山曼荼羅は 5 つの重要な要素で構成されている。まず、8 世紀に立山で修行した最初の人物とされる佐伯有頼の伝説を通して表現される信仰の誕生から物語が始まる。地獄や天国など、山頂に至る道中のさまざまな風景は、巡礼者の精神的な旅を象徴するものとして描かれている。最後の要素は、山麓にある布橋で、聖地と人間の世界を隔てる精神的な境界を表している。この橋は、山に入ることを禁じられている女性たちが、山への登頂と同じ恩恵を授かることができると信じられている儀式を行う場所でもあった。

江戸時代の立山曼荼羅は、現存するもので約 50 体。日本中から見つかっていることから、立山信仰を布教するための道具として機能していたことがうかがえる。立山山麓の集落に住む僧侶たちは、この絵とともに布教の旅をし、全国の人々に信仰のメッセージを伝えた。